

# 伊野川から忠別川までの地名②7

## キムクシペツは、神居川

掲載図は、国土地理院の平成十八年発行の二万五千地形図に、アイヌ語地名を記載したものである。今回は、掲載図の中の「キムクシペツ」について述べる。

キムクシペツは、右の国土地理院図では、上流部の忠和五条四丁目付近に、「神居川」と現行河川名が記載されている。

安政四年（一八五七年）に、松浦武四郎が丸木舟に乗って、オサラッペ川付近を通過した時に、写真①の野帳（フィールドノート）に、「キンクシヘツ 右」と記録し、出張復命書に当たる報文日誌の「再篙石狩日誌」では、次のように記述している。

キンクシベツ―此川も古川にて流

れなし。大番屋おおばんやのうしろの方より来る。此処イワンパカルの古家有りしとかや。

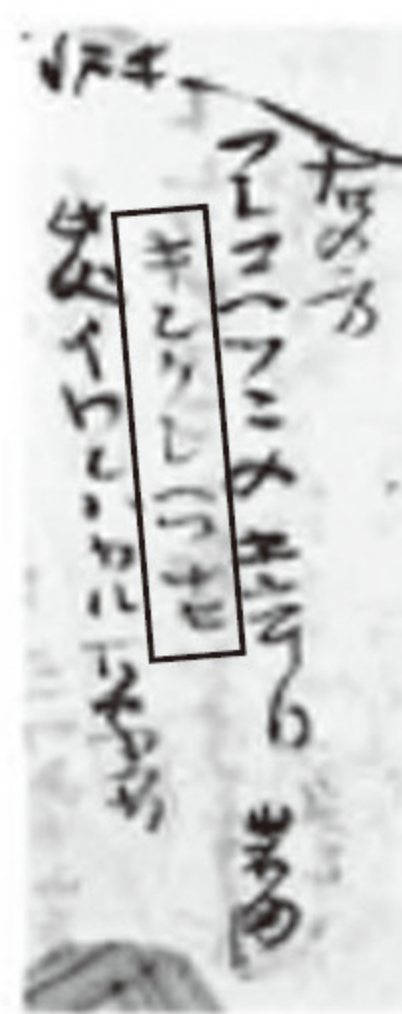
又、子丑（註―北北東）の方へ針を取り搔上るかきのぼに本川（註―石狩川の本流）え出る也。此処サルフツ（註―オサラッペ川）の式三丁上也。此川すじ凡二十丁も廻り来るも、本川にては漸々五六丁位の事也。

キンクシベツは、「キムクシペツ (Kimsus-pet 山側を・通る・川)」である。和人とアイヌが交易をする建物が大番屋で、現在の忠和三条七丁目付近にあった。キンクシベツは、それより山側を流れている川で、現在の神居川がこれに該当する。

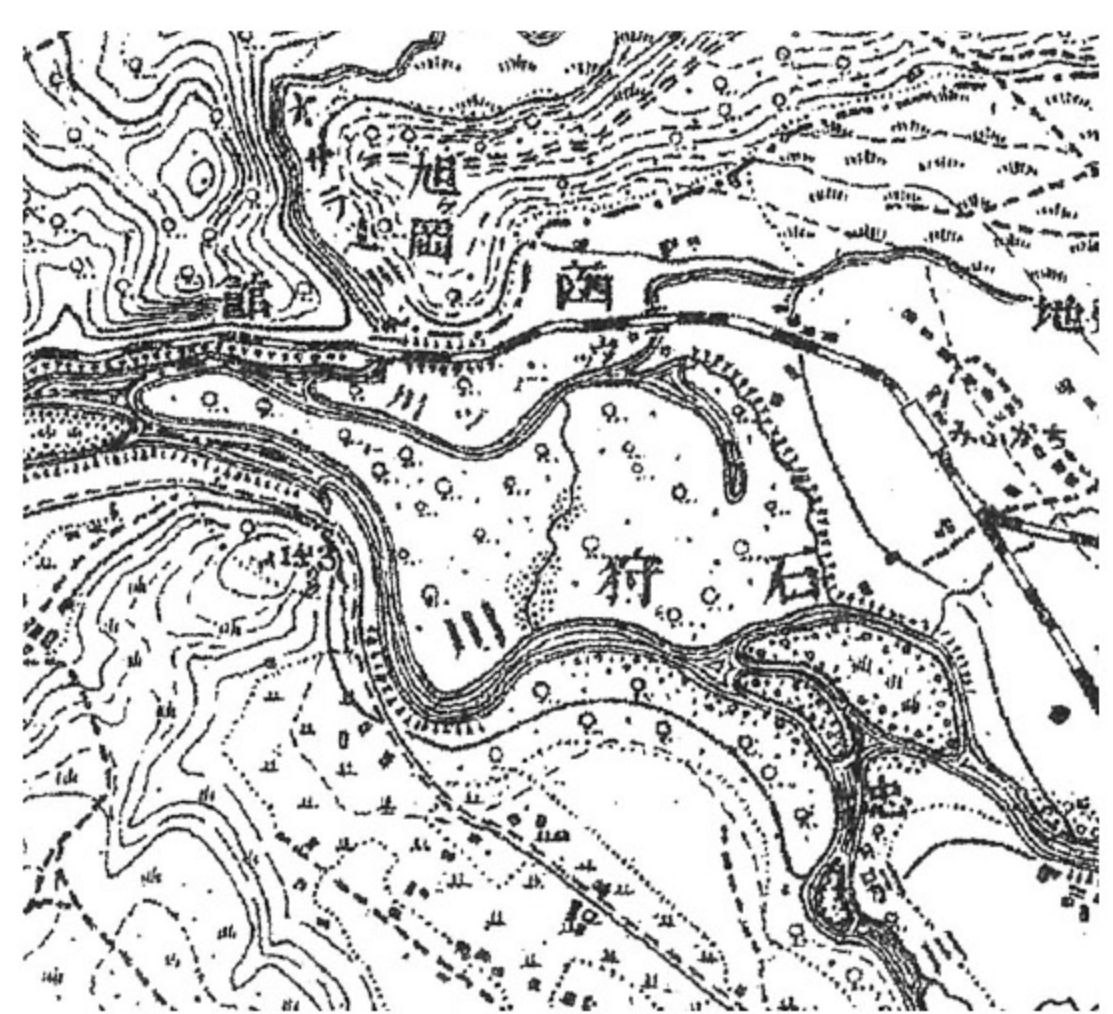
右のキンクシベツは、これも、松浦武四郎の自筆の写真②の「川々取調帳」でも分かるように、チカブニあたりに、石狩川の旧流である、フシコペツ (husko-pet 古く・川↓本流



写真① 「野帳」



写真② 「川々取調帳」



写真③ 「北海道仮製五万分一図」

丸木舟に乗っていると、右側にキンクシベツが見えてきたので、武四郎はそのキンクシベツについて前述のように記したのである。

「再篙石狩日誌」では、フシコペツは、「川中二十間（約三十六尺）も有り遅流也。むかしの本川なるよし。右の方曲がりて入り行くこと、凡十丁計はかりにて、前記の「キンクシベツ」の記事に続くのである。

ところが、松浦武四郎の記事は、珍しくここでは乱れていて、「キンクシベツ」の文章中の、

「又、子丑の方へ針を取り搔上るに本川に出る也。」以下の文は、フシコベツについての記事である。

掲載図では、石狩川は右岸側を流れているが、写真③の明治四十三年改版の陸地測量部『北海道仮製五万分一図』では、石狩川の主流は、左岸側を流れていることが判明する。

掲載図での範囲だけで見ると、石狩川の主流が左岸を流れている五万分一図は、写真③の明治四十三年改版の『北海道仮製五万分一図』から、昭和三年まで続き、昭和二十七年の地理調査所発行の五万分一地形図から、掲載図のように、石狩川の主流部が右岸側になっているのである。

今回は、安政四年当時の石狩川のフシコベツと支流のキンクシベツを検討した。

（アイヌ語地名研究会幹事）  
※毎月第1週号に掲載します

# 断章 旭川のアイヌ語地名研究

138

高橋 基